

13世紀の東アジア情勢と高麗・大越・日本

榎本 渉

はじめに

13世紀ユーラシアの最大の焦点は、言うまでもなくモンゴル帝国である。1206年に大遊牧帝国を建てたモンゴルは、世紀終わりまでに東アジア・中央アジア・西アジア・ロシアの大部分を支配下に収め、東南アジア・東ヨーロッパまで侵攻し、インド・西ヨーロッパ諸国とも交渉を持った。大越（陳朝）・高麗・日本もこの動向に巻き込まれた当事者であることは、言うまでもない。

しかしモンゴルがもっとも関心を向けたのは、大越・高麗・日本ではない。少なくとも華北の金を滅ぼした後は、世界最大の富を持つ江南の南宋が最大の攻撃目標だった。南宋は1234年、モンゴルと共同で金を攻めてこれを滅ぼしたが、この時に旧金領の扱いをめぐる両国で対立が生まれた（南宋が河南の開封・洛陽・帰徳の領有を主張）。モンゴルは翌年南宋遠征を行うが失敗し、以後両国は旧宋金国境線の淮河を挟んで対峙する。中国では宋（960～1279）が中国の大部分を制圧した979年より2世紀半、北の遼（916～1125）・金（1115～1234）と宋が長く対峙する状況が続いていたが、遼宋間の澶淵の盟（1004）、あるいは宋金間の紹興和議（1142）に見るように、南北の二王朝は平時においては盟約に基づく平和な関係を築いていた。これに対して南宋・モンゴル間ではそのような関係は最後まで結ばれず、以後40年余、常に軍事的な緊張をはらみつつにらみ合う状況となる（なおモンゴルの中央政権は1271年に国号を大元に改めるが、本報告では便宜上モンゴルで統一する）。

本報告では、この前後の時期の東アジアにおける大越・高麗・日本の位置を、モンゴル・南宋の並立という状況を念頭に置きつつ確認したい。¹

1 以下、基本的な史実については、Abraham Constantin Mouradega d'Ohsson. *Historie des Mongols*, I-IX. Le Haye et Amsterdam, 1834-35（『モンゴル帝国史』1～6として、1968～79年に平凡社東洋文庫より日本語版刊行）、池内宏『元寇の新研究』上、東洋文庫、1931年、盧啓鉉『高麗外交史』甲寅出版社、1994年（韓国語。2002年延辺出版社より中国語版刊行）、山本達郎『安南史研究』I、山川出版社、1950年、山本達郎『陳朝と元との関係（一二二五—一四〇〇年）』『ベトナム中国関係史』山川出版社、1975年、などによる。史料としては『宋史』『元史』『元高麗紀事』『国朝文類』『高麗史』『高麗史節要』『安南志略』『大越史記全書』などを参照しているが、煩雑さを避けるために、必要な部分以外は掲出しない。

1. 高麗の外交

モンゴルは建国直後から金を脅かし、これを滅ぼした後には宋と対峙した。この間モンゴルは近隣諸国を自らの陣営に付けるかもしくは征服することで、対金・対宋包囲網の形成を図った。1224年、タングートの西夏の投降（1227年滅亡）などはその一環である。高麗も同様にモンゴルの圧力を受けた。高麗は金の冊封を受けていたが、モンゴルの台頭によって金が衰退すると、金麗国境の遼東では治安が悪化し、高麗は契丹人の侵入に悩まされた。高麗は1219年にこれをモンゴルと挟撃し、以後モンゴルと関係を持つようになる。だがモンゴルは高麗に貢納など高圧的な要求を行い、1225年に高麗でモンゴルの使者が何者かによって殺害されたように、両国間の関係は当初より緊迫したものだ。高麗は1231年以後断続的にモンゴルの侵攻を受けたが、陸戦に強いモンゴル騎馬軍に対抗するため、開城府から海上の江華島に遷都して徹底抗戦の構えを示した。

高麗はこの過程で金との連絡を断ち、南宋・日本との連絡を取り始める。南宋慶元（現在の浙江省寧波）の地誌『宝慶四明志』巻6、市舶には1224年のこととして、「高麗は金の曆を廃棄して、十干十二支の曆法を宋と同じくした。その宗廟・社稷・城邑・州閭・官称・冠服は、みな中国（宋）を思わせるものだった」と記す²。ただし13世紀に高麗が宋に公式の使者を送ったことはない。当時慶元が高麗・日本に通じる主要貿易港だったことを考えると、この情報は高麗政府が貿易船を通じて宋に伝えたものだろう³。この頃の高麗では武臣の崔怡が政治の実権を握っており、モンゴルとの抗戦においても主導的役割を果たしたが、彼は1225年、王の高宗に「本朝の文物・礼楽は、すべて宋の制度に従いましょう。宋国から来る者は、臺省・政曹の清要の職で、才能に応じて用いましょう」と上言しており、宋制を採用しようという動きは実際にこの頃の高麗で見られたものだった⁴。

またこの頃高麗南岸では倭寇の活動も始まっていたが、崔怡は1227年、日本に二次の使者を送り、高麗は日本の大宰府の進奉船（朝貢の使船だが実質的には公認貿易船）を毎年1回2艘以内で受け入れ、大宰府は倭寇を禁圧するという定約を締結し、南憂の解決も目指した⁵。高麗の南宋・日本との接触はモンゴルとの関係が緊張を増していた頃のことであり、いずれ来るべき軍事衝突に備えて両国の協力もしくは中

2 「高麗乃棄金正朔、以甲子紀年曆法、等中国。其宗廟・社稷・城邑・州閭・官称・冠服、率彷彿中国」。

3 宋麗間を往来する海商が外交上の役割を担ったことについては、李鎮漢「高麗時代における宋商の往来と麗宋外交」『年報朝鮮学』12、2009年。

4 『高麗史節要』高宗12年12月条、「本朝文物・礼楽、請一遵華制、其自宋來投者、許於臺省・政曹、隨材擢用」。

5 近藤剛「嘉祿・安貞期（高麗高宗代）の日本・高麗交渉について」『朝鮮学報』207、2008年。

立を得る外交的意図が背後にあったと考えられる。

だが1258年3月、高麗の崔氏政権はモンゴルとの戦争の最中にクーデタで崩壊する。これに代わった金俊政権は12月にモンゴルと和議を結び、翌年4月その要求に従って王太子（後の元宗）を入朝させた。これをもって高麗はモンゴルに屈服したとされる。ところが高麗はモンゴルの要求の内、都を江華島から開城に戻すことについては、頑として受け付けなかった。これがモンゴルへの警戒の現れであることは明らかである。高麗首脳部は戦争終結のために一定の譲歩はしたが、戦争再発の可能性も考えて島から出ようとしなかった。

高麗の外交を担当する役所である礼賓省は、この頃に慶元に帰国する宋船で、3人の宋人・金人を送還している。彼らはいずれもモンゴル軍に拉致された後、1257年7月に馬の世話役として、主人に随行して対高麗戦に従軍したが、11月に脱走し、翌年正月に江華島で高麗高宗を拝した。そしてその1年後、王太子入朝直前の1259年3月、高麗は彼ら3人を宋海商范彦華の船で帰国させた（4月慶元着）。范彦華は江華島と慶元を往来していた貿易商人だろう。高麗はこの時、あわせて礼賓省から慶元府に牒式文書を送っている。そこには3人が高麗に来た事情と、これを送還する旨しか書かれていないが、江華島に留めていた宋人・金人の送還が国王謁見から1年以上の時間差をもって行われたことを考えれば、単なる人道的措置のはずがなく、南宋との親交を深めるという裏の目的があったことは明らかである。高麗はモンゴルとの和議進行の裏で、当時盛んだった貿易船の往来を利用して、南宋とも連絡を取っていたのである。

この関係は、以後もしばらく続いたと考えられる。高麗では1268年に金俊政権が倒れて新たに林衍、次いで子の林惟茂が政権を執ったが、1270年にこれが討たれると、鄭仲夫の乱（1170）以来の高麗武臣政権は終わりを告げ、新国王元宗は1世紀ぶりに王による親政を復活させた。元宗は開城府への還都を決定し、以後モンゴルの支配を実質的にも受け入れる。ところが同年12月、元宗はモンゴルのクビライ＝カーンから詰問を受けた。これより以前、高麗が南宋・日本と交通していると言う者がいたので、クビライが元宗にこのことを聞いたところ、元宗は交通の事実はないと答えたことがあった。ところが1270年、元宗がひそかに発遣した南宋の商船が高麗に帰ってきたため、クビライから派遣されていた東京（遼陽）行省の頭輦哥に詰問され、元宗は商船のことを知らせていなかったことを認めた。これがクビライのもとに伝えられ、元宗はその詔によって叱責を受けたのである⁷。

この一件からは、高麗が1258年以後、表面上はモンゴルに従いつつ南宋にも通

6 『開慶四明統志』巻8、收刺麗国送還人。

7 『高麗史』巻26、元宗世家、元宗11年12月乙卯条。「又詔曰、「……如前年、有人言高麗與南宋・日本交通、嘗以問卿。卿惑於小人之言、以無有爲對。今年、却有南宋商船來、卿私地發遣。迨行省致詰、始言不令行省知會。是爲過錯。……」」。

じ続けていたことが推察されるが、1270年の遷都による監視強化により、こうした両面外交は終止符を打たれたと考えられる。なお日本との通交も南の金海府でひそかに行われていたが、1272年にこのことが発覚して、クビライの命で地方官が処刑されている⁸。

2. 大越の外交

13世紀後半には、大越にもモンゴルの影響が及んでいった。モンゴルは対南宋戦において、淮河・長江を越えて直接都の臨安を目指す方向とは別に、周囲を囲んでいく戦略も採った。特に西部の四川は、1230年代からたびたびモンゴルによって襲撃されていたが、1251年にモンケが即位すると、対南宋計略を任された弟のクビライは、1253年に四川を越えて雲南に遠征し、大理国を服属させた。その後クビライは中国へ引き上げたもののモンケと対立を深め、モンケは1257年にクビライを外して自ら対南宋戦の指揮を執る。この作戦の一環として、雲南に駐屯していたウリヤンカダイは、11月に大越に侵攻した⁹。その目的は、大越を経由して南から南宋を攻めることにあった。

大越の太宗は翌年息子の聖宗に譲位するとともに、モンゴルに使者を派遣して服属の意を示した。この結果ウリヤンカダイは計画通り、1259年に大越経由で南宋の広西に攻め込んでいる。もっとも同年、モンケは四川で陣没し、クビライは荊湖の鄂州（武昌）での戦闘後に撤兵した（鄂州の役）。以後モンゴルではモンケ後継者の地位をめぐり、クビライとアリク＝ブカの兄弟間で内乱が勃発し（1260～64）、外征の余裕はなくなる。

クビライは1260年、皇帝（カーン）として雲南・大越に使者を送り、大越は翌年これに応じて使者を送った。この結果、上皇の太宗は安南国王に封じられた。『元史』『大越史記全書』からは、以後大越とモンゴルの間で使者が頻繁に行き来したことが知られる。またモンゴルからはダルガチが派遣されて行政などを監督した。ところが『宋史』の本紀・礼志・交趾伝などを見ると、大越は1261年以後も南宋に朝貢を行っており、南宋もこれに対して太宗・聖宗父子に回賜や加封・加号を行っている（別掲表）。

これを見る限り、大越は1261年以後も連年南宋に朝貢を行い、1262年には聖宗の襲封を求めて認められている¹⁰。陳朝大越国の南宋遣使は建国（1225）以後、1229・1235・1236・1243・1251・1256・1257・1258年に確認され、1249・1254年

8 『高麗史』巻27、元宗世家、元宗13年7月甲子条・10月己亥条。

9 『安南志略』巻4、征討運餉。

10 なお『安南志略』巻13、陳氏世家はこの件を1258年とするが、これは太宗譲位の年に掛けたものか。

年代	記事	出典（書名のないものは『宋史』）
1261	安南國遣使、奉貢獻象三。 又遣貢。仍下詔獎諭、遣使賜金並法錦。	『宋史全文』景定2年11月甲戌条 (理宗本紀同日条／交趾伝にも関連記事) 『安南志略』卷13、陳氏世家
1262	都省言、「廣西經略安撫司申、『安南國、進貢賀昇平禮物』。詔、「戸部、依例給賜」。安南國王陳日熨（太宗）、遣使入貢、表乞世襲。詔、「日照、特授檢校太師・安南國大王、加食邑、男威晃（聖宗）、特授靜海軍節度觀察處置使・檢校太尉兼御史大夫・上柱國・安南國王・効忠順化功臣、仍賜金帶・器幣・鞍馬」。	『宋史全文』景定3年5月庚午条 (『宋季三朝政要』にも関連記事) 『宋史全文』景定3年6月庚戌条 (理宗本紀同日条／交趾伝／礼志、賓礼、諸国朝貢にも関連記事)
1264	詔、「安南國、表貢方物。其所進象及華靡之物、令有司却還、仍優賜答之」。	『宋史全文』景定5年5月乙未条 (理宗本紀同日条／『宋季三朝政要』にも関連記事)
1265	咸淳元年二月、加安南大國王陳日熨功臣、增安善二字、安南國王陳威晃功臣、增守義二字、各賜金帶・鞍馬・衣服。	礼志、賓礼、諸国朝貢
1266	安南國、遣使賀登位、獻方物。 (咸淳)二年、復上表、進貢礼物。賜金五百兩、賜帛一百匹、降詔嘉獎。	度宗本紀、咸淳2年8月甲申条 礼志、賓礼、諸国朝貢
1269	詔、「安南國王父陳日熨・國王陳威晃、並加食邑一千戸」。	度宗本紀、咸淳5年12月庚戌条 (交趾伝にも関連条文)
1272	安南國王陳日熨・陳威晃、各加食邑一千戸、賜鞭・鞍・馬等物。	度宗本紀、咸淳8年11月己巳条 (交趾伝にも関連条文)
1273	安南國、進方物。特賜金五百兩・帛百疋。	度宗本紀、咸淳9年6月己丑条
1274	加安南國王陳日熨寧遠功臣、其子威晃奉正功臣。	瀛国公本紀、咸淳10年11月丁酉条

にも南宋から太宗への賜号・加号が確認できる。史料に即する限り、1254年以後宋越間で使者の往来が盛んになるが、その契機はモンゴルの雲南制圧（1253）による軍事的脅威だろう。そしてその交通関係は、大越のモンゴル服属以後も継続して行われた。1274年末に宋が太宗・聖宗に加号した前提には大越の遣使があった可能性が高く、また1273年には明確に大越の遣使が行われている。宋越交渉は南宋滅亡が決定的になる直前まで続いていたことになる¹¹。これが事実であることは、『安南志略』巻2に収める1278年のクビライの詔で、宋から接收した書類から、大越が宋と通交していたことが判明したとして、大越が叱責されていることから明らかである¹²。大越からモンゴルへの朝貢は、南宋滅亡まで陸路で西北の雲南経由で行わ

11 モンゴルは南宋度宗の崩御（1274年7月）を待って1274年9月に南宋征服の軍を起こし、翌年南宋から和議の申し出があるも受け入れず、1276年正月には恭帝が降伏し首都臨安（杭州）を明け渡した。南宋は以後も残存勢力が1279年まで抵抗を続けるが、王朝としては1276年に事実上滅亡した。

12 「昔爾與宋通交、固所素知。及宋平之後、所以慕奉之礼、著之載籍、可覆視也。天下之事、以至誠為本。今欺給若是、將誰信是」。

れたと見られるから、¹³陸路・海路を通じて東北方面の南宋と通じることは容易だったであろう。1274年、大越に宋人が海船30艘をもって大越に来附したという説も、¹⁴南宋・大越が海を通じてつながっていたことを示す。

このように、南宋・モンゴル二大国が対峙する中で、高麗と大越はモンゴルへの服属を認めながらも、その支配が強まるまで、裏で南宋との関係が続けていた。そうすることによって、モンゴルへの抵抗を可能にする国際的条件を保持しようとしたのである。

3. 南宋・日本・李璣

モンケ時代の1250年代、大理・高麗・大越など南宋周辺の諸国は次々とモンゴルに服属していった。南宋はすでに北方でモンゴルと接し、その軍事的脅威にさらされていたが、その上西方・南方もモンゴルの影響下に置かれることになったのである。高麗・大越が裏で南宋とも通じていたことは今まで述べた通りだが、やはり全面的な信頼関係は築き難い。そのような中で南宋の外交の出口として唯一残されたのは東方、すなわち海路だった。

呉潜は1256～59年、慶元で南宋水軍を統括する沿海制置司の地位にあった人物だが（『開慶四明統志』巻1、郡守）、彼は1257年頃に理宗に提出した奏状で、「私がひそかに思いますに、中興南渡（1127年宋の華北喪失＝南宋成立）以来、我が国の声教は西北方面ではほぼ接することがありません。ただ高麗・日本二国だけが東南の海隅を介して、まだ宋を向慕することを知り、現在まで通商しています」と冒頭で述べた上で、遭難した日本人・高麗人を厚く保護すべきことを主張する。呉潜は、これによって遠人がみな宋朝の恩を知ることになり、それは宋の海防にも密接に関わるだろうとする。¹⁵海商の厚遇を通じて日本の歡心を買うことを意図した提言だった。さらに1258年には、日本船が持ってくる金を徵税や官貿易の対象にすることが日本人の恨みを買う原因になるとして、日本が高麗とともにモンゴルに属する恐れも考慮し、金の徵税・官貿易の停止を主張して理宗の許可を得た。呉潜によれば、倭人を怨ませ、そのことを高麗人からモンゴルに伝えさせるのは、四方が平和な時ならばよいが、海道に危惧の多い時は決してしてはならないという。¹⁶つまり呉潜は、現在海道が危険な状態だから特別な対応策が必要だと考えたのだが、この主張が認められたことを見るに、南宋官界でもこうした発想は杞憂とは考えられなかったらしい。13世紀半ばの日本は自覚の有無にかかわらず、東シナ海のキャスティング

13 山本達郎『安南史研究』I、山川出版社、1950年、66頁。

14 『大越史記全書』宝符2年10月条。

15 呉潜『許国公奏議』巻4、奏給遭風倭商錢米以広朝廷柔遠之恩亦於海防密有關係。

16 『開慶四明統志』巻8、蠲免抽博倭金。

ボートを握る位置に置かれていた。

モンゴルはまもなく1266年から日本に使者を派遣し、服属を求めるようになるが、1271年と1272～73年の二度日本へ派遣された趙良弼の事跡を記した碑文によれば、日本はモンゴルと講和しようとしたにもかかわらず、南宋が滕原瓊林という僧侶を密使として派遣したために失敗した。¹⁷ 滕原瓊林は、藤原姓の僧侶だろう。この頃宋に渡った桂堂瓊林という日本僧が知られ、同一人物と考えられる。虚舟普土という宋僧の法語などをまとめた『虚舟普土禅師語録』には、1303年冬至に書かれた桂堂の序が付されるが、桂堂は其中で、虚舟と別れて30年と記している。桂堂は宋では虚舟に学び、1273年頃に別れて日本に帰国したらしい。その時に宋の高官からモンゴルの外交活動を妨害するように依頼されたのだろう。当時日本の貿易船はもっぱら慶元を出入りしており、慶元や宋都臨安を含む浙江を行脚し修業する日本僧も多かったから（名前が分かるだけで200人近くいる）、日本にとって南宋は高麗やモンゴルよりも親近感の湧く存在だった。そして南宋はそのような経済的・文化的交流を利用して、日本・モンゴルの連携を食い止めようとしたのである。

ただし日本と南宋の間では、使者の派遣を伴う正式な外交関係は結ばれず、モンゴルの軍事行動に対しても援軍を送り合うことはなかった。軍事的に劣勢だった南宋は、戦争に対して概して消極的で、モンゴルに脅かされる他国を救い国際的な求心力上昇を目指す志向も乏しい。たとえば大越はモンゴルの侵攻を受けた1257～58年頃に南宋に救援を求めたが、南宋は南方の守りを固めるのみで、援兵派遣は行わなかった。¹⁸ そう考えると、高麗・大越が裏で南宋と通じたことが、外交上で実質的にどの程度の効果を持ったかは疑問である。他に頼る選択肢がなかっただけという説明も、十分に可能だろう。

しかし一件だけ、興味深い事例がある。1217～62年、二代半世紀にわたって山東を支配した李全・李壇である。李全は金が衰退した1217年に反乱を起こして自立し、南宋に通じた。南宋は従来毎年金に絹や銭を支払うことで戦争を回避し、国際関係の安定を図ったが、1215年にこれを止めたため、1217年金と開戦に至った。李全はこれを見て南宋に通じ、南宋も李全を支持したのである。しかしモンゴルは時を追うごとに勢力を拡大させたため、李全は1227年に南宋と断交してモンゴルに臣従した。この頃のモンゴルは旧金領の直接的把握の志向は薄く、各地に自立した漢人軍閥を臣従させて自治を認め、その地位を世襲させることで華北の間接支配

17 太田彌一郎「石刻史料「賛皇復鼎記」にみえる南宋密使瓊林について」『東北大学東洋史論集』6、1995年。

18 『宋史全文』宝祐6年6月辛巳条、「上曰、「安南求援之情、頗切。所當嚴兵、以待大全」。奏、「糧食未到、所調戍兵未行、見此催督」。上曰、「此事不可頃刻緩」。『宋史』卷44、理宗本紀、宝祐6年9月甲寅条、「詔、「安南情狀叵測、申飭邊防」。大越の救援要請は、同年に派遣された使者（『安南志略』卷13、陳氏世家、『大越史記全書』紹隆元年正月条）と関わるものだろう。

を実現した（いわゆる漢人世侯¹⁹）。李全・李璡はその代表だが、その支配圏は海岸部にも及んでいたため、南宋の海防上で一つの脅威となった。

しかしクビライは即位してまもなく、1261年頃から華北の支配を強化して、漢人世侯の権限削減および解体を目論むようになる。これに対して李璡は他の世侯にも共闘を呼び掛けて、1262年に反乱を起こした。クビライが弟のアリク＝ブカと内戦を繰り広げていた状況も、反乱を促す動機になっただろう。李璡はこの時、それまで敵対関係にあった南宋にも漣水・海州などの領土を献じて軍事協力を求め、南宋はこれに乗じてモンゴルへの北伐を行い、李璡にも救援の資金・兵を送った。²⁰

結局この反乱は同年中に鎮圧されたため、南宋にとって成果といえるものはなかった上、モンゴルのさらなる警戒を買うことになってしまった。だがここで注目すべきは、南宋は成功の見込みがあると判断さえすれば（李璡についてはその見込みは外れたが）、周辺勢力への軍事的・経済的援助も行う可能性があったということである。高麗・大越・日本については時機が合わず、軍事協力が実現することはなかった。だがそれは“ありえる選択肢”ではあったはずで、だからこそ大越も南宋に援軍要請を行ったのだろう。南宋は劣勢とはいえ反モンゴル勢力の実質的な結集核となり得る存在であり、さらに李璡の乱に見るように、南宋の存在自体が内乱の温床にもなり得た。したがってモンゴルからすれば、南宋攻略は単なる対外侵略というだけではなく、自国の安定のためにも必須の事業だった。南宋はモンゴルにとって、早晚滅ぼさねばならない存在だったのである。

おわりに

1270～80年代、南宋はモンゴルに滅ぼされ、日本は抵抗を続け、大越はチャンパとともにモンゴルの実効支配をはねのけた。クビライは最後まで日本・大越の服属を諦めなかったが、1294年に崩御すると、以後の後継者たちによってこの方針は放棄される。この結末自体は周知のことだが、それ以前、東アジアに南北二大国が対峙した時代において、高麗・大越など周辺諸国が必ずしも大国の言いなりになることなく、自律的な外交活動を展開していたこと、南宋もこれを受け入れるとともに、日本を自陣営に取り込もうとしていたことは、注意に値する史実であろう。

19 愛宕松男「李璡の叛乱とその政治的意義」『愛宕松男東洋史学論集』4、元朝史、三一書房、1988年。

20 黄寛重「経済利益与政治抉择」『南宋地方武力』東大図書公司、2002年。